「日々の理科」（第 1144 号） 2017（H29),-8,24

「北極圏旅行記 2017 夏（28)」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

～7 / 31　トーネ湖とラポーテン～

夏のアビスコは風景もすばらしく、有名なトレッキングコース Kungsleden（「王様の散歩道」、総延長約 450km）の入口でもあるので、スウェーデン北部でもかなり人気の観光地だ。しかしアコモデーションがあまり充実していないので、宿泊先の確保が難しい。

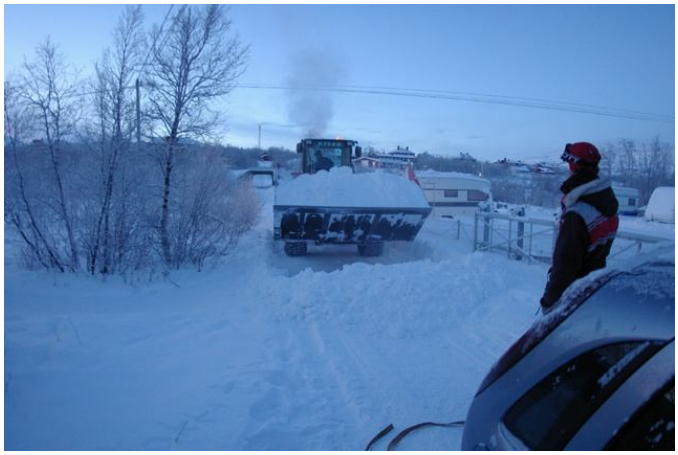
私が泊った「アビスコ・ゲストハウス」も、夏は宿泊客が多いので、泊りきれない人はティピー（大型テント）にも泊れる（もちろん個室よりも安い）中は意外に広く、快適そうだった。

アビスコ・ゲストハウスは、アビスコ駅のすぐ目の前にある。小さな駅だが、ストックホルムからの直通寝台列車やノルウェー行きの急行もすべて停車するので、旅行者にとっては大変便利だ。駅舎は変電所も兼ねているので、堂々として風格がある。

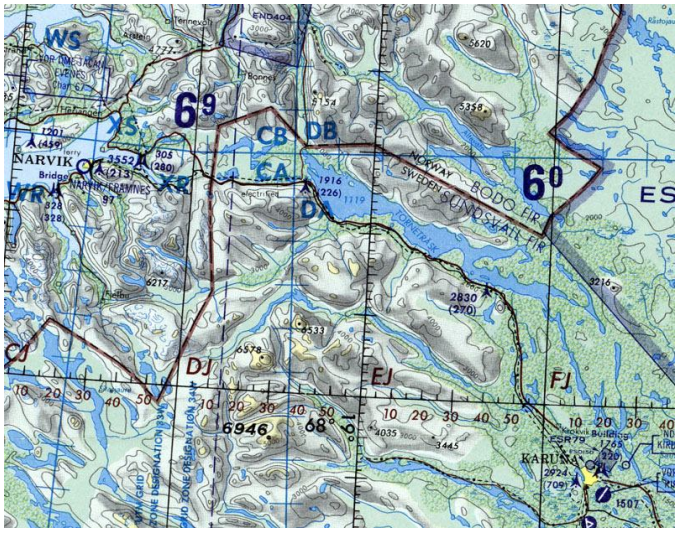
ちょうど、ナルビク（ノルウェーの港街）から、キルナ（鉄鉱石の鉱山街）へ戻る、貨物列車が発車するところだった。約 70 両編成だった。スウェーデンには、大西洋（ノルウェー海）に接する領土を持たない。もともとこの鉄道は、スウェーデン産の鉄鉱石を、ナルビクまで運ぶために建設された。ナルビクは、ノルウェーにありながら、スウェーデンの「外港」の役割を果たしてきたのだ。フィヨルド沿いの岩峰に線路を敷く為に、大変な難工事だったという。また、超重量の長大な貨物列車が一日に何往復もするので、線路の路盤の強さは、世界屈指とも言われている。

そんな目的で敷設された鉄道なので、旅客列車はおまけのような存在である。旅客列車の運行は、実は赤字なのだそうだ。しかし鉄鉱石運搬で利益をあげているので、その恩恵で旅行者も乗れるというわけだ。

駅前から、国道をくぐるトンネルを抜けるとトーネ湖の湖畔へと通じる道に出る。夏は自動車も通れる道だが、冬はスキーやスノーモービル専用の雪道になる。私はこの道でトラブルに見舞われ、苦い思いをしたことがある。同時に、それは温かい思い出でもある。



2003 年の冬に、オーロラ観望の為に、アビスコに滞在した。湖畔に通じるこの雪道を、私は無謀にも自動車で行こうとした。しかしすぐに深雪に車輪をとられ、動けなくなった。私はアビスコ在住の友人、モニカに電話をして助けを求めたら、ご主人が大型重機で助けにきてくれた。助け方のスケールがすばらしい。それにスウェーデン人の優しさもすばらしい。



Torneträsk（トーネ湖）はスウェーデン最北部、ノルボッテン州の北極圏にある湖だ。氷河が流れた方向に細長く、幅は 10km 前後だが、長さは 70km もある。スウェーデンで 6 番目に面積の大きな湖だ。上図はトーネ湖（「トルネ湖」と書く場合もある）付近の航空地図である。左端がノルウェーのナルビクがある「ヴェスト・フィヨルド」、右下の黄色い記号が、鉄鉱石の産地 Kiruna（キルナ）である。トーネ湖を水源として「トーネ川」が流れ出し、下流ではスウェーデンとフィンランドの国境の川となる。

ヴェスト・フィヨルドとトーネ湖は、スカンジナビア山脈で分断されている。山脈がもう少し低ければ海水が流入し、大フィヨルドになったはずだ。そうすれば、スウェーデンも大西洋に面したことになる。

この日はよく晴れていたが、風が非常に強く、湖畔に長い時間は居られなかった。湖面も波立ち、ボートを出す人も見られなかった。

アビスコのシンボル的な存在が、Lapporten（ラポーテン）という山である。この日は雲に隠れて、なかなか姿を現さなかったが、湖畔から帰ろうとした時に、一瞬山頂部分を見ることができた。

「ラポーテン」というのは、正確には山の名ではなく、山と山の間にある谷間の名称だ。快晴の日には、こんなに美しい姿を見せてくれる。（2004 年夏撮影）